

リップステイック2

目次

リップステイック2

5

結婚準備編

163

新婚生活編

247

リ
ッ
プ
ス
テ
ィ
ツ
ク
2

川島比奈は同じ会社の牧田を呼び出し、二人でカフェに来ていた。篠原亍哉とのことを、誰かに聞いてほしかったのだ。

ここは以前、彼とよく来ていた店。恋人だった頃の思い出がいっぱい詰まったこの場所には、亍哉がアメリカへ行ってからは牧田と来ることが多かった。

比奈は牧田に促され、このなりゆきをどうにか話した。

亍哉は幼馴染である健三の兄で、比奈が初めて心から好きになった男性。商社に勤める彼のアメリカ転勤が決まった時、遠距離恋愛をする自信がない、と比奈が言い出して、結局別れてしまった相手だ。渡米して間もなく、彼はアメリカ人の女性と結婚したと、健三から聞かされた。付き合っていた当時、別れを切り出したのは比奈だが、亍哉の結婚の事実を知った時は、身を切られるような思いだった。彼がすでに自分とは違う新しい道を歩み出しているという事実が辛かった。まだ恋に臆病になる気持ちはあるものの、やっと心の傷が癒えてきたと感じていた矢先——思いがけず再会してしまった。

牧田に誘われて行ったホテルで開かれたお見合いパーティー。そのホテルにたまたま仕事で来ていた彼と再会した。それがきっかけで亍哉に誘われ、翌日二人でディナーに出かけた。そこで比奈は亍哉に「ずっと忘れられなかった」と言われたのだ——

亍哉と食事に出かけたあの日から、二日が経っている。

牧田は比奈の話聞き終えると、小さくつぶやく。

「会ったのね」

比奈は何も言えなかった。会うな、と牧田には言われていたのだ。けれど、比奈は会いたい気持ちに負けてしまった。

「それで？」

二人でディナーに出かけた日、比奈が奥さんのことを聞くと、亍哉は薬指の指輪を外して、半年前に離婚したのだと告げた。長く身に着けていた証に指輪の跡が残っていて、彼が他の女性と共に歩んできた月日の長さを感じさせられ、比奈は苦しかった。だが同時に、彼が指輪を外した瞬間、ふっと心が軽くもなった。

「亍哉さん、離婚してました」

「……そうなの？」

たいして驚いた様子もなく、牧田はコーヒーを飲んだ。

「何もされなかったの？」

「どうしてですか？」

「好きな女が目の前にいて、自分はすでに独り身。つまり、縛る鎖はないはずなのに、どうして何もしないのかな、とと思って」

淡々と言う牧田の言葉に、比奈は少し赤くなる。

「亓哉さんは、そんな人じゃありません」

亓哉はそんな人じゃない。いきなり手を出したりするような人ではない。

比奈は短い付き合いをしただけが、それはよく知っている。

恋人として付き合った期間は短くても、彼のことはよく知っているから。出会ったのは比奈が中学生のころだ。出会ってからを計算すると十年以上。

だからわかるのだ。亓哉はいくら以前付き合っていたからと言って、何かをするような人ではない、と。

「あらそう。でも私は篠原さんのこと、そんなに知らないから」

「目蓋に指で触れられただけです」

「本当にそれだけ？」

恋人同士だった時、亓哉は比奈の目蓋をよく撫でていた。そんな亓哉の手を、比奈は目蓋を震わせながら受け入れていた。そしてそのあとは、必ずキスをされた。

だから今回も、もしかしたらキスされるかも、と思わないわけではなかった。もしそうになったら

どうしようと、期待と不安に心臓がうるさいほど高鳴っていた。

けれど亓哉は何もしなかった。目蓋に触れるだけで満足したように、笑顔を浮かべて言ったのだ。

「家まで送るよ」と。比奈は小さく息を吐き、彼に住所を教えた。

「それで、車で送ってもらった、と？」

「そうです。本当に他には何もされてないし、電話番号さえ聞かれなかった」

電話番号も聞かれなかったことで、比奈は内心がっかりしていた。

好きだと言ったくせに、亓哉はどうして行動を起こしてくれなかったのか。あのホテルのエレベーターの中の告白は、比奈の聞き違いか、それとも亓哉は過去形で話していたのか。

「もしかして、すでに他に好きな女性がいるのかも。離婚して半年だもの、もしそうだったとしても、早すぎるってことはないわ」

「……そうかもしれません」

やはり亓哉のあの言葉は過去形、あるいは嘘だったのだろうか。

期待してしまった自分が悲しい。

「どうしてそんな泣きそうな顔するのよ。自分で言っておいて」

「してませんよ」

「いや。きつと店を出たら泣くわ」

牧田にそう断言されて、比奈は下を向く。

「……わかった。まだ好きなのね？ いいんじゃないの？ 独身になったんだから」

牧田の励ましの言葉に元気づけられ、比奈はやっと顔を上げられた。

「電話番号を聞かれなかったのなら、どうして自分から聞き出さなかったの？」

「……そんなこと、できません」

「できるとかできないとか、そんなことはかり言うの、そろそろやめなさい。来年には三十歳になる大人の女でしょ？ 電話番号を聞くくらいのもので、モジモジしてたらダメ」

比奈には、自分から電話番号を聞いた経験なんてない。たとえそれが好きな相手でも、聞かれなかったら仕方ない、と今までずっとあきらめてきた。

けれど今は、壱哉の気持ちを信じて、一步踏み出してみたい思いもある。

『迷惑かも知れないと思っただけど、比奈さんが好きだから会いたかった』

あの日、壱哉から言われた言葉——。比奈の知っている彼は嘘をつかない。

だから、「好きだから会いたかった」と言われた時、嬉しかった。

この人は今も自分のことを思ってくれているかもしれないと思っただのだ。

比奈があれこれ思案していると、牧田はおもむろに携帯電話を取り出し、誰かにかけた。

「もしもし、健三君？ 篠原さんの電話番号が知りたいの。個人情報？ しばくわよ」

あまりの行動の早さに、比奈は驚いて牧田を見た。

「私が電話するのよ。いけないの？ うん、うん、わかった。じゃあ、またね。今度また飲みで

も行きましょ」

そう言っただけで牧田は電話を切り、ナプキンに書いた番号をプッシュする。

「牧田さん、あの、何をしてるんですか？」

「篠原さんに電話するの」

「いいです、かけないで！」

「どうして？ 好きなんですよ？ やり方が強引なのはわかってるし、こういうことしたくないけど。でもね、私はあなたが大切だし心配なの。前の彼氏が忘れられなくて、電話番号も聞けなくて泣きそうになつてるところを、放っておけないから」

出ないわね、と言っただけで牧田は終話ボタンを押し、テーブルの上に置く。そうして一度ため息をつき、比奈を見つめた。

「こういうことは本来、比奈ちゃんができるべきことだと思う。彼のことを本当に思っているなら、これくらい頑張っただけでいいと思う。今の比奈ちゃんなら、きつと踏み出せる。以前ほど人見知りをしなくなった。笑顔も可愛くなった。篠原さんときあうようになってからだわ」

牧田はにこりと笑って、比奈の頭を撫でた。

「前に私、篠原さんに言ったの。『あなたは比奈ちゃんの人生に影響を与える人だ』って。比奈ちゃんが英語の先生になったのも、雰囲気柔らかくなったのも、あの人がきっかけでしょ。あのときちゃんと恋愛をして、確かに別れは辛かったと思うけど、それもひとつの経験だと思う。既婚者

を好きになるなんてダメ、って言ったけど、離婚したなら別にいいと思うわ。好きなら、頑張りなさい」

比奈の目から小さな涙がポロリと落ちた。

「これくらいで泣かないでよ。大丈夫、比奈ちゃんなら」

比奈は涙を拭き、笑顔でうなずいた。

牧田もうなずいて、比奈の手を握る。

そこで、牧田の携帯電話が鳴った。牧田はちらりと比奈を見ながら電話に出た。

「もしもし……牧田です」

比奈の心臓が高鳴る。きつと相手は亓哉だ。

「この前は久しぶりにお会いしたのに、ご挨拶もせず失礼しました。ええ、そうなんです、電話番号を健三君に聞いて。個人情報だぞってぬかしましたが、強引に聞き出しました。ご迷惑でしたか？」

牧田が笑顔になって、比奈を見る。

「今、お仕事中ですか？ そう、それならよかった」

牧田はうなずきながら、比奈のほうへ身を乗り出す。

「あ、ちよつと待って下さい」

牧田が電話を差し出す。比奈は一息のんで、電話を受け取り、耳に当てる。

『もしもし？』

亓哉の声が比奈の耳に直接響く。この前にこうやって電話で話をしたのはいつだっただろう。

『……比奈さん？』

「はい」

電話口で、少し笑う気配がした。

『どうした？』

『……いえ……別に』

牧田が「別にじゃないでしょ」と言っただけで比奈を見ている。

「ま、牧田さんが、かけたんです。それで、私がそばにいたから……お仕事、ですよね？」

『残業なんだ。別に電話は構わないよ。……牧田さんに代わってくれる？』

比奈は何も言わずに、電話を牧田に向けた。

牧田は不満そうな顔をして受け取ると、亓哉と二言三言話してから電話を切った。

「比奈ちゃん、あんたちゃんと話しなさいよ、まったくもう」

「……ごめんなさい」

「まあ、いいわ。篠原さん、ここに来るって。私は帰るから、待ってなさいよ」

「え？ あの、どうしてそういうことに」

「篠原さんが、場所を教えるって言うから教えたの。比奈ちゃん、きちんと自分の気持ちを伝えな

さいね」

牧田はにこりと笑い、一人で先に帰った。

まもなく壱哉はここへ来るだろう。壱哉が来たなら何を話そうか、と比奈は思いをめぐらす。

つきあっていた頃は、何を話すかなんて考えたことはなかった。しかし、いつも話題を提供するのは壱哉で、比奈から話しかけたのは、三度に一度あるかないかだった。

比奈は、今度こそ自分から話しかけようと思いつつ、「先日はごちそうさまでした」と切り出すか、それとも「牧田さんがいきなり電話してすみませんでした」とでも言おうか、と迷っていた。

あれこれ考えているうちに、壱哉が到着した。仕立てのよいスーツにきつちりと締めたネクタイ。手にはネイビーブルーの革のブリーフケース。今日はコンタクトなのだろう、メガネはしていない。壱哉は比奈を見つけると軽く手を上げ、カフェの客の視線を一身に集めながらこちらに向かつてくる。遠目にも壱哉はカッコ良かった。どこから見ても、上等な男そのものだった。

「比奈さん」

壱哉は微笑を浮かべる。

「お仕事はいいんですか？」

比奈は話しかけた。

「残りは明日で大丈夫。それより、比奈さんが何か話したそうだったから」

「電話番号、牧田さんが勝手に健三から聞き出してしまつてすみません」

「ちょっと驚いたけど、別に構わないよ」

「牧田さんつて、実はもう『牧田さん』じゃなくなつたんですよ。……結婚して水沢みずさわさんになつたんです。私は今も牧田さんつて呼んでますけど」

「そうなんだ。時間の流れを感じるな」

「職場では今も牧田姓で通しています。名前を変えるの面倒だからつて」

壱哉はうなずいてから、コーヒーを買ってくる、と席を立った。

その間に比奈は今の状況を頭の中でまとめた。

『好きなら、頑張りなさい』

牧田が言った言葉を反芻する。

その間に壱哉はコーヒーをたのみに行つたようで、トレイに載せて戻ってきた。彼は、砂糖とミルクは少量の苦めの味が好みだった。比奈はうんと甘いコーヒーが好きだけれど。

「何か言いたいこと、あつたでしょ？」

「……はい」

そう言つて比奈は壱哉の左手の薬指を見つめる。指輪を着けていた跡は、すっかり消えていた。その様子に、ホッとする。

「新しい……携帯の番号、聞かなかつたのが気になつていて。聞けば良かったなつて」

比奈は、やつとの思いでそう言つた。壱哉はブリーフケースから携帯電話を取り出す。

「赤外線で送っている？」

比奈はうなずく。『篠原七哉』と設定してあるナンバーとメールアドレスが比奈の携帯に登録された。

「いたずら電話はしないように」

「したことないでしょ？　っていうか、用事がなければ電話しないし」

そう言ってしまうてから、比奈はまた可愛くない発言をしたことに気づく。でも七哉は穏やかに笑っている。

「じゃあ、僕からもかけるから番号を教えてくださいませんか」

比奈も赤外線で自分の番号を送った。

「ひな、って平仮名だけ？」

「牧田さんが設定してくれたままになっているんです。私、あまり携帯電話をいじったりしないから」七哉は携帯電話を操作し、そしてフリップを閉じる。

電話番号とメールアドレスの交換が終わると、もう話題がなくなってしまう。

「電話番号を聞きたかったです」

「そうです……いや、あの……」

言いたいことがあるのに、どう話を切りだしていいかわからない。

「本当は、僕も聞こうと思ってたことがある。この前のディナーの帰り、比奈さんは車をさっさと

降りて、早歩きで家に帰っちゃったから。送られるのが、よっぽど嫌だったのか聞きたかった」

「違います。……あの時は、緊張していて。それに、猫が待っていたし」

「猫？　飼ってるの？」

「はい。ミラっていう名前の子猫です。拾ったんです……だからマンションもペットが飼えるところに移ったんですよ」

「なるほどね。そうだったのか」

七哉は、苦笑しながら言った。

「実はアメリカに行ってから、比奈さんに連絡を取ろうとしたことが三回あった。一度目はコールはしたが比奈さんは電話に出なかった。二度目は携帯電話が解約されていた。そして三度目に連絡を取ろうと思った時、健三に相談した。健三が言っていたよ。比奈さんは僕からの電話を待つのが辛くて携帯を解約した、って。君が住む場所を変えて、髪も切ったっていうことを健三から聞いた。健三に、どうして言うなら連絡をとってやる、と言われて、諦めてしまったんだ」

比奈が携帯電話を解約した理由は、新機種への交換よりも新規買い替えのほうが安かったからである。七哉からの電話を待つのが辛くて解約したわけではない。

比奈は、七哉に新しい番号を伝えようと思ったのだけれど、七哉のアメリカの連絡先を健三に聞くことはなぜかためられたのだった。

「君に辛い思いをさせて悪かったと思っていて、四度目のチャレンジはしなかった」

「亓哉さんが私に連絡をとろうとしていたなんて、全然知らなかった。私だって、結婚してしまった元恋人に、連絡なんかできない」

そうして比奈がうつむくと、亓哉が口を開く。

比奈は顔を上げて、亓哉を見た。どこか寂しいような笑みを浮かべる。

「そうだね。でも、結婚生活は思うようにいかなかった。最後の半年くらいは、別居だったな」

別居と言った時、亓哉は少しだけ目を伏せた。

「別居、ですか？」

「そうなんだ。せっかく好きな人と結婚したのに努力が足りなかったよ」

好きな人と結婚した、というそれに胸の痛みを覚える。亓哉は比奈以外の人を好きになって結婚した。それはしようがないことだと思う。別れたのだから、結婚したって文句は言えない。

しかし本当に好きな人だったから。比奈にとっては心から好きになった、初めての人だから。だから胸が痛む。

胸の痛みはしようがないことだけど。

「後悔しますか？」

比奈が聞くと亓哉は首を振った。

「遅かれ早かれこうなっていただろう。別れたこと自体は後悔してないんだ。お互い、これでよかったと思う。僕は君を忘れられなかったからね」

後悔はしていない、と言える亓哉は大人だ。比奈は亓哉と別れて後悔だらけだった。

亓哉と再会した日のお見合いパーティーでは、誰に声をかけられても、たいして話せなかったし、ブルーのスーツを着ていた亓哉を思い出すばかりだった。

愛に誘われて行った合コンパーティーでも、さんざんだった。会ったばかりの人に突然キスをされて、目に触れられて、不快な思いをした。

「比奈さんを忘れられなかったけど、彼女との生活は楽しかった。毎日、お帰りと言ってくれる人がいるのは、幸せだと思えた。ただ、自己主張が強いところもあってね。合わせるのは大変だったよ。その大変さと思うと、君への思いも思い出す時が多くなった。ある意味、彼女との結婚生活では学ぶことも多かったね」

「学ぶこと？」

「そう。感情的な喧嘩の仕方、とか。感情的になることはあまりなかったし。文化の違う異国の人との共同生活とか、他人に合わせるということの難しさ。こっちはかりが折れるのは、かえって悪いんだって思ったりしたしね。全寮制の学校に行っていたから協調性はあるほうだと思っていたけど、男と女では違うことも多いから」

「亓哉さんでも感情的になることあるんだ？」

比奈が言うと、亓哉が苦笑して「そうなんだ」と話を続けた。

「いい意味で、彼女から引き出された感情なんだ」

そう静かに言った壹哉の顔は、遠くアメリカへ思いを馳せているようにも見えた。

「別れる時はさすがに感情的になった。喧嘩になって頬を張られて、僕は君の写真を、ゴミ箱に捨ててしまった。その後も何度も話をしたけど、ダメだった。結果、アルバムがなくなっても、いつまでも比奈さんへの思いを忘れられない僕がいた」

壹哉と比奈はあまり写真を撮らなかつた。その数少ない写真を、互いに大切にアルバムにおさめていたことを思い出す。けれど、それを渡米の時にまで持って行っていたなんて思わなかつた。持つて行ったとしても、結婚する時には捨ててしまうのがはじめなのではないだろうか。

「アルバム、持つて行ったんですか？」

「写真は捨てられなくてね。でもそれが見つかつてしまつて。夫婦仲がぎくしゃくしていたところへ、喧嘩の種がまたひとつ増えたという感じだった。僕は、一度はゴミ箱に捨てたアルバムを、また拾つて家を出た」

比奈には、壹哉が感情的に喧嘩をする姿など想像できなかった。比奈はいつも壹哉の掌の上で転がされているような感じで、喧嘩になりようがなかつた。怒るのはいつも比奈のほう。壹哉も多少は気分を害しているような時はあつたが、たいしては、冷静に比奈を操つていた。

「できれば、もっと……そう、彼女と向き合つて、もっとよく話し合つて、お互い歩み寄ればよかつたと後悔する気持ちもある。先に家を出てしまつた僕の我慢が足りなかつたのかもかもしれない。でも、あの時はあの時で一生懸命だったし、そんな自分達が最善だと信じた結果だから、結婚も離婚

も後悔していない。本当にこれでよかつたんだ」

比奈と別れた頃よりも、壹哉はさらに柔軟な考え方になつていく。

比奈とつきあつていた頃の壹哉は、こんなに穏やかに自分の悪いところをさらけ出すことはなかつた気がする。比奈の前で、他の女の人の話することもなかつた。

でも今、壹哉は正直に元妻のことを話している。感情が高ぶつたり心が揺れているような様子もない。

比奈はそんな風に正直に話してくれている壹哉に、心が動いていた。彼の真摯な態度は、比奈に對する告白のようにも思えたからだ。

比奈に真実を話す壹哉は、誠実だと思えた。

つきあつていた当時、壹哉は喧嘩になりそうになると、比奈をベッドに誘つた。比奈は、何だかセックスで誤魔化されているような気がしていたが、壹哉にこう言われたことがある。

『君には手をあげられないし、怒鳴るのも嫌だ。それだけ君を好きだから。喧嘩するくらいなら、身体で発散したほうがいい。そうすれば、どれだけ相手のことを思っているか確かめられる。もし嫌いだつたら、僕の行為を受け入れられるはずがないでしょ。比奈さんはそういう人だから』

この言葉を聞いて、比奈は真つ赤になつた。

面と向かつてそんなことを言われれば、誰だつて赤面するに決まつている。

だけど壹哉は臆面もなくそう言う。そんなストレートで情熱的な物言いに、この人の祖先には絶

対ラテン系の人がいるはず、と想像を巡らせた。

そして今、比奈は改めてこう思うのだ。

この人が好きだ、と。

「君の好きな人は、どういう人？」

不意に聞かれて、比奈は焦る。

この前食事をした時に、好きな人がいる、と壱哉に言ったのだ。

「教えてほしいな」

「もったいないので、教えません」

「もったいつける意味がわからない」

「意味なんて、わからなくていいです」

「僕の知っている人？」

すぐには答えられなかった。

知っているも何も、と心の中でつぶやく。

壱哉が今話した離婚話には、元妻への配慮も愛も感じられる。きつと夫婦関係は解消してしまっただけれど、二人の間には強固な信頼関係が築かれているのだろう。

比奈は自分も元妻のように、壱哉の心に何かを残せているのだろうか、と考えた。けれど、何も残せている自信はない。彼にとつて自分は、きつと懐かしいだけの過去の恋人。

だから、ここで今、自分の気持ちを言うことはできない。

「その人のこと、信用していいかわからない」

比奈がそう言うと、壱哉は苦笑した。

「そんな相手なら、やめておいたほうがいいと思うけど」

「そう思います？」

「比奈さんが信用できないのならね」

壱哉は、腕時計を見る。ブルーのフェイスの時計は、比奈の見たことのないものだった。以前は黒いフェイスの時計だった。比奈も時間が気になってショッピングの時計を見ると、午後八時半を回っていた。

「時間、気になります？」

比奈が聞くと、壱哉は「別に」と言った。

けれど壱哉は、普段はあまり時間を気にするような人ではなかった。仕事の途中で抜けだしてきただから、気にしているのかもしれない。

だから比奈から、こう切り出した。

「もう遅いですよね。帰りましょうか」

そう言っておきながら、まだそんなに遅い時間などとは思っていなかった。だけど比奈には、今の場所にいることが、少し息苦しかった。

さつき壱哉は、比奈のことを今でも好きだと言ってくれたけれど、その言葉を思い出しても胸の苦しきは楽にならない。

壱哉は本当に比奈を思っているのだろうかと思う。

もしそうではなかったら、と考えると、怖くて壱哉に思いを伝えることなんてなおさらできない気がした。

「比奈さんは、明日仕事？」

「はい。午前中に準備をして、午後から講義が入ってます」

「じゃあ帰ろうか、と壱哉はコーヒーを飲み干した。

「送ろうか」

「……車、ですか？」

「今日はね。会社に置いてあるから、一緒に取りに行こう」

「いいえ私は電車で、と言おうとしてやめた。今さら何を意識する必要もない。

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

壱哉はそう言っ、先に店を出た。比奈もその背を追いかけて外に出ると、もう春だというのに肌寒い。急いで上着をおった。

「壱哉さん、いつ帰国したんですか？」

「三月二十日」

「……すごい偶然ですね」

三月二十日は比奈の誕生日だ。そして二年半前の二十六歳の誕生日は、壱哉からはじめてプレゼントをもらった日でもある。ハート型のペンダントを贈られたのだ。

だけどその後、壱哉との交際は一年も続かなかった。それだけ浅い関係だったのかもしれない。

なのに、比奈の心は壱哉を求めつづけているのだ。惹かれちゃいけない、と思いつつも、壱哉のことを考えずにいられたかった。

「あの日、気がついたら、比奈さんの誕生日だった」

と笑いながら話す壱哉を見上げて、比奈は尋ねた。

「三月二十日、私のことを思い出しました？」

別に本気で言ったつもりはない。だから、もし壱哉が冗談めかして返事をして、比奈は笑って対応するつもりだった。ところが――

「そうだね。その日がくるたびに、いつも君のことを考えていたよ」

と壱哉は真剣な面持ちで言うのだった。

そこからは互いに話をせずに歩いた。

そして二人は目的地に着く。

比奈は、初めて壱哉の会社のロビーへ足を踏み入れた。思わず声が出そうなほど立派なビルで、

外も内もシンプルだけど、とてもお洒落しゃれな雰囲気。床は鏡のようにピカピカで、姿が映りそうなほどによく磨かれている。

受付にいた女性が、亓哉に向かって軽く頭を下げる。

「こんな時間なのに」

「彼女ももうすぐ帰るよ。今日はちよっと残業したんだろう」

亓哉と比奈はエレベーターに乗り込み、地下の駐車場へ向かった。ランプが二回点灯する車が目に入った。比奈は促されたけれど、ここへ来て少しためらう気持ちも芽生えた。

運転席に行きかけた亓哉が足を止め、比奈のほうを振り向いた。

「亓哉さん、信用できる人じゃないとダメだって言いましたよね」

「そうだね。じゃないと、僕も心配だ」

「どうして心配なの？」

「君は僕の特別な人だから。変な男につかまってほしくないな」

「特別」という言葉が、胸に響く。けれど何だか余計にもどかしい気持ちになり、苦しかった。

「信用できる人ってどんな人？ 教えてくれますか？」

「誠実で、比奈さんのことだけを思ってくれる人。君が、心を許せると思った人」

「……そんな人、今のところ、健三以外にいませんよ」

「君は、まだ健三が好きなのか」

「友達として、ですよ」

亓哉はため息をついて、助手席側のドアを開ける。

「乗って、比奈さん」

比奈は黙って従った。亓哉は口では好きだと言っておきながら、それ以上のことは何も言ってくれない。

下を向くと涙が出そうだった。さっきの話の内容と、自分の心が苦しくて。

亓哉が運転席に乗ると、少しだけ車体が揺れる。ドアが閉まり、この話はもう終わりだな、と比奈は思った。だが、亓哉はなおも言う。

「僕は君だけを思っていたわけじゃないと思う。だから、誠実かといえば、そうじゃない。それに、僕は一度は別の人と結婚した身だ」

車のキーを差し込む音、そしてエンジンがかかる音が聞こえた。

「以前、僕とつきあっていた頃も、君はどこか心を許していないようなところがあった。それを思うと、僕は信用できる人物じゃあないね。そうだろうか？」

「……」

「君は昔から、僕に好きだと言ったことがない。でも僕は君が好きだ。君がほしい」

比奈は唇を引き締める。そして亓哉の目を見ずに、こう打ち明けた。

「言ったことがなくても、わかってくれてると思ってきました。は、はじめてエッチした時だって、

どれだけ……もう、いいです。家に帰して」

早く帰りたい。もう、こんな話をしていたくない。そう思ったけれど、ここで何も言わずに離れてしまったら……

「辛い思いをさせて、ごめん」

比奈の頬に壹哉の手が優しく触れた。泣きそうになる。

「好きなんだ。だから、君もそう言って」

「好きなんだ」という言葉が、比奈の先ほどから苦しかった思いを救った。

元妻への包み隠さぬ思いを聞いても、やっぱり好きだという気持ちには変わりなかった。そんなことはどうでもよくて、この人は今、比奈のことをどう思っているのか、それだけが比奈の心を、不安要素として厚く覆おほっていた。

好きだと言う言葉を聞いた途端、比奈の心は浮上した。

たった、それだけで。これだけで。

比奈は壹哉の身体をシートに押しつけるようにして彼に抱きついた。

「……好きです。好きなんです、ずっと好きだった」

好き、好き、と比奈はうわごとのように繰り返した。壹哉は比奈の背に手をまわして、きつく抱きしめる。

「なんだか、本当に……君との恋愛は苦勞する。……顔を上げて」

壹哉にそう言われて顔を上げる。首に壹哉の大きな手を感じていたら、彼のもう一方の手は比奈の腰を抱いた。

ゆっくりと唇が近づいてきて、壹哉が比奈の頬に軽くキスをする。

そして互いの唇が重なって、濡れた音が聞こえた。久しぶりのキスだった。

「ん……っ、壹哉さん……っ」

壹哉のキスは啄つばむようなものから、唇を深く合わせるものに変わっていく。

比奈も優しい舌の動きに応えながら、壹哉を抱きしめる手に力を込める。

「やばいな」

唇を離して壹哉がつぶやいた。そして苦笑しながら比奈を見る。

「これ以上すると、したくなる」

「私、と？」

壹哉は比奈の腕に触れる。二の腕から肘にかけてゆっくりと触れてゆき、にこりと笑った。

「……想像しているだけよりも、現実、もつといい」

「……想像しているだけよりも、現実、もつといい」

「……想像しているだけよりも、現実、もつといい」

「私も前に他の男の人とキスしました」

「……誰と？」

「知らない人。いきなりされて、とても嫌だった。目蓋にも触られて……」

壱哉はその言葉のため息をつき、そして比奈の頬に触れる。キスはもちろん、目蓋に触れるのはとても不快だった。

壱哉しか触れたことがない、壱哉にしかされたくないことだったのに。

比奈の恋愛の基準は、いつも壱哉だ。

今、こうして抱きしめられているように、誰かの腕の中にとしたら、壱哉しか嫌だった。キスも、目蓋に触れるのも、それ以上のことも。

「キスとセックスは違う。でも、その男、許せないな」

「私にとつては同じこと。泣きながら帰った」

比奈はそう言って、壱哉の肩に額を預けた。

「君は可愛いんだから気をつけないと。何かされてからじゃ遅いだろう」

呆れるように言ったその声を聞いて、比奈はまじまじと壱哉を見る。

「壱哉さんは、そういうつもりはまったくなかったですか？ 二日前も？」

比奈に好きだと言っておきながら、そういうつもりはなかったのだろうか。

「まったくなかったとは言えない」

「……私、可愛くないと言いましたよね」

比奈が目をつせると、その顎を持ち上げられる。そして少し荒っぽいキスをされて、きつく抱きしめられた。

狭い車内でもつれあい、比奈は心も身体も熱くなる。

「君を持ち帰るよ。いい？」

比奈は何も言わなかった。うなずきもしなかったけれど、壱哉はそれを肯定と受け取ったようだ。

壱哉はシートベルトをして車を発進させる前に、もう一度比奈の唇に食むようなキスをした。

明日は仕事だとか、そういうことはどうでもよくなっていた。

今、この人と一緒にいたい。ただそれだけだった。

2

壱哉は帰国以来、トレジャーホテルのスイートルームに長期滞在している。こんなに広い部屋は必要ない、と思っていたが、住んでみるとやはり快適そのものだった。

壱哉は財布の中からカードキーを取り出した。

「部屋は20001号室。比奈さん、先に行つて。フロアには二つしか扉がないから、すぐにわか

るよ」

「……壹哉さんは？」

「車を停めてから行く。先にあがって待っていて」

ホテルの地下のエレベーター前で別れる。すぐに来たエレベーターに乗る比奈を見送ってから、壹哉は車に戻った。

携帯電話のボタンをプッシュする。三度のコールで相手が出て、お疲れ様です、と言った。壹哉の秘書の春海だ。

「明日アメリカへ行く便を午後からのものに変更してほしい」

『ええ、構いませんが、どうかしました？ 早く行って面倒な仕事を片づける、とおっしゃったのは篠原さんじゃないですか』

「急用ができた」

『わかりました。では、明日』

壹哉は、用件だけを手短かに話し、電話を切った。

「さて、どうするか……ホテルの前にコンビニがあるな」

エマと別れた時、これではらくは女性には縁がないだろうと思いついて、避妊具はすべて捨ててしまった。比奈と会ってもそういうことにはならない、と決めていたのだが。

あの日偶然、トレジャーホテルで比奈に再会した。比奈を見てしまったら、彼女を手に入れたくて、欲しくてたまらなくなった。何とかしてもう一度会えないかと、そればかりを考えていた。

「ここで迷っていてもしょうがない」

壹哉は車を降り、エレベーターで一階まで上がって、ホテルの外に出た。ホテルのすぐ前にあるコンビニに入り、迷わず目的のものを購入する。

それからホテルに戻ってフロントに立ち寄った。

「お帰りなさいませ、篠原様。お手紙をお預かりしております」

壹哉は手紙の束を受取り、マネージャーに言った。

「会社にカードキーを忘れてきてしまった。申し訳ないが、スペアを貸してもらえないだろうか」

「かしこまりました」

マネージャーは、スペアキーをフロントカウンターの下から取り出した。

「どうぞ、こちらをお使いください」

「ありがとうございます」

壹哉はうなずいた。すぐにエレベーターが来て、素早くそれに乗り込んだ、ほかに誰も乗っていない。早く比奈の下へ行けと言わんばかりに、すべてがスムーズに進んだ。

ただしそれも、本当に比奈がいれば、の話だ。

「君を持ち帰る」と壹哉は言った。しかし、最後の決定は比奈に任せた。比奈が壹哉のことを思っているなら、きつと待っているはずだ。けれど、比奈の保守的な性格を考えれば、部屋へは行かずに帰ってしまう可能性もあった。

カードキーでドアを開けると、比奈は確かにそこに立っていた。

ちよつと驚く。

「ちゃんと待っていてくれたんだ？」

吉哉に抱かれるために、比奈が吉哉の部屋にいる。これがどういうことか、と考えた。比奈は吉哉に抱かれていいと思ったからここにいるのだ。

ただそれだけのことなのに、二年半ぶりだからか、緊張と嬉しさが込み上げてくる。

「え？」

首を傾げた比奈に、吉哉は笑顔を向けた。

「もしかすると、待っていてくれないかもしれないと思った」

比奈が顔を伏せる。

やっぱり帰る、と言われるのが怖かった。部屋の照明を消すと、窓の外のネオンが、スイートルームの豪華な白壁に反射した。

吉哉は比奈に近づいて身体を引き寄せる。そして唇を重ねていく。

唇を啄み、何度も吸い上げた。比奈の唇の感触をこんなと感じたのは久しぶりで、いつの間にか抱き締める手にも力がこもっていた。

「……っ」

吉哉を高ぶらせる感触。この細さ、この柔らかさ。強く抱きしめていることで、比奈の胸の感触

が身体に伝わる。

全身で比奈を感じる。まったく男つてやつはしょうがない、と我ながら思ってしまうほど、吉哉の身体は正直に反応していた。

比奈が少し苦しそうに吉哉の胸元に手を置いた後、ジャケットの襟を強く握ったので、唇を離してやる。その代わりに、比奈の白く細い首から顎へ、唇で辿っていく。比奈のジャケットを脱がせ、ブラウス越しに柔らかい胸に触れる。

「は……っん」

久しぶりに聞く甘い声を、比奈は出すまいとして手で唇を覆ってこらえていた。吉哉は比奈の甘い声をもっと聞きたくて、比奈の手を取ってそこへキスをする。それからまた唇を啄み、浅いキスを繰り返して、開いた唇の隙間から舌を差し入れる。

細い身体をすぐ近くの壁に押し付けて、胸に触れた後ブラウスの下に手を入れ、背に手を回してブラジャーのホックを外す。背中を優しく撫でてから、直に比奈の胸に触れた。

さらにキスが続けながら、胸を揉み上げる。二年以上の時を経て直接感じる、温かい肌の感触と乳房の柔らかさに、吉哉の口からは知らず小さなため息が零れた。柔らかい感触が吉哉の心も身体も興奮させる。

しかし、しばらくすると胸を揉む手を比奈が掴んで止めた。

「ここじゃ、嫌です」

「久しぶりに聞いたよ、そのセリフ」

つきあっていった当時、ベッド以外でしようとする、比奈は嫌がった。変わらないセリフに苦笑する。

比奈は壱哉の愛撫の手を止めようとするが、構わず優しく揉み続けた。

「いつも、ベッド以外だとそう言っていたね」

言いながら柔らかい乳房を揉み上げると、比奈は熱い息を吐いた。もう一方の乳房も同じようにすると、比奈は壱哉の手を掴んで抵抗したが、その力は弱々しかった。

「あ、ん……っ」

壱哉は比奈の耳に唇を寄せて、言った。

「ベッドへ行く？」

「……さ、つきから、ここじゃ嫌、って……っ」

壱哉は愛撫の手を止めない。比奈が腕の中にいると思うと、身体に触れずにいられない。

大腿を彷徨っていた壱哉の手が、比奈のショーツにかかる。比奈は少し抵抗したが、壱哉は手を止めなかった。我慢できず、比奈のショーツを下げ、行為を進めようとした。

「い、ちやさん。お願い……っん」

比奈に懇願している比奈を見て、壱哉は観念した。そのまま比奈の身体をお姫様抱っこする。相変わらず軽い身体だ。

ベッドの上で優しくしようとしても、今夜は無理かもしれない。

壱哉は、比奈をベッドへと連れて行った。

「君がほしい」

そうささやいたが、比奈にその言葉はすでに聞こえていない様子だった。すでにぐったりしており、壱哉からされるがままだった。

けれど、それでもいい。ほしいと言ったのは素直な気持ちで、もう一秒だって待てそうにない。

比奈の身体をまたいで膝立ちになり、壱哉は服を脱ぎながらコンビニで買った箱を枕元に放った。手を伸ばした比奈は、それが何であるのか感触だけで分かった様子だ。

「いち、やさん、これ、いつ買った、の？ 持ってた、の？」

「まさか、さっき買ったんだよ」

スラックスのベルトを抜いて、ボタンを外した壱哉が、比奈の身体に覆いかぶさる。

素早く比奈のブラウスを脱がせ、スカートも脱がす。それからショーツの中に手を入れようとすると、逃げようとしたので身体で抑えた。

「は、あ」

そうしてショーツの中に手を入れ、比奈の大切なところに触れる。すでに少し濡れている。比奈は目を開いて大きく息を吐き、それから目を閉じて壱哉の肩に手を回した。

「ん……っふ」

比奈の声に煽られて、壹哉は比奈の隙間に指を入れる。少しずつ、ゆっくり入れたが、とつても狭い。何度か指を中で動かすと、肩に回した手に力がこもる。

「痛くない？」

すると比奈が甘い息を吐きながら首を横に振ったので、指を一本増やした。濡れた感触が最初よりも数段増し、部屋中に水音が響く。指で比奈の中を愛撫しながら、唇で胸を愛撫する。

比奈は最初は身体を硬くしていたが、行為が進むにつれ、力が抜けていった。比奈は以前、自分の身体に触れた男は壹哉だけと言っていた。比奈の性格と今日の反応を考えると、今も自分しか知らないように感じる。壹哉しか触れたことのない身体というのに、ひどく興奮した。身体中に触れたくてたまらなかつたが、下半身も張りつめてズキズキと痛いくらいだった。

指を抜いて脱力している比奈の足を開く。抵抗しないのを確認して彼女の顔を見る。目が合うと恥ずかしそうに目を逸らされた。壹哉はその様子にもひどく興奮した。比奈は壹哉を煽るのが、いつも上手い。早く入りたい気持ちを抑えるのは、至難の業だった。キスをしながら自分のモノをあてがって、ゆっくりと押し入る。狭い、と思った。だが、この感覚が気持ちよかつた。しばらく動かず、比奈の中を堪能する。

入れた時、比奈は少し痛そうな顔をしたが、壹哉はすっかり煽られていて、優しくする余裕がない。けれど何とか自制心を奮い立たせて、比奈の頬を撫でた。

「この感覚、久しぶりだ」

壹哉の声に応えるように比奈が少しだけ笑う。そんな顔をしたら、ますます優しくしてあげられなくなる、と思いつつながら身体を少し強く突き上げた。

「あっ……！」

比奈が声を押し殺してシーツを掴む。もつと声を聞きたくて、我慢して欲しくないと口をつた。

けれど比奈は首を横に振ったので、もつと声を出させたくて壹哉は腰を揺らす。思った通り優しくできなかつた。それでもついてきてくれる比奈が愛しかつた。二年半、焦がれていた身体。思い通りに突き上げて、最後の瞬間まで比奈の身体を自分本位に愛した。これまでの時間と距離を埋めるように。

* * *

比奈を何度も抱いた。

日頃の疲れがたまっているはずなのに、目は冴え、身も心も心地よく溶けた。満ち足りていた。

比奈と別れ、エマと結婚して、そして離婚した。まさかもう一度、比奈を抱ける日が来るとは思わなかつた。一度別れ、その後は電話で話さえしたことがない相手とヨリを戻し、ふたたび身体の関係を持つことになるなんて、今までの壹哉だったら考えられないことだった。

だが壹哉は、比奈のことが今でも好きだとはつきり告げた。

比奈も壹哉を好きだと言ってくれた。

壹哉は、自分の幸運に感謝する。

隣に眠る比奈の白い顔を眺めていると、過去の思い出がとめどなく溢れてくる。

いつもお互いの家で会っていたあの頃。比奈を抱く度に、比奈という特別な存在を意識した。どうしてこの人はこんなにも特別なのだろう、といつも考えていた。

再会した今ならわかる。

初めて会った十五年前のあの頃から比奈が好きだったのだ。比奈に恋をしていたのだ。

会う度に可愛く、綺麗になっていく比奈に、壹哉は心惹かれていたのだ。

そして健三の結婚式の日、偶然目にした比奈のつけた桜色のキスマーク。あの姿を目撃した瞬間、壹哉ははつきりと恋に落ちたのだ。

「好きだ」

比奈の細い身体を抱きしめて、唇に軽くキスをする。

この人には、いつまでもそばにいてほしい。

そう思いながら壹哉も目を閉じた。

* * *

ベッドに膝立ちになった壹哉が、比奈のブラウスを性急に脱がしていく。壹哉自身もジャケット

を脱ぎネクタイを捨て、シャツのボタンを片手で器用に外していった。

そして壹哉は、枕元に紙製の箱を放り投げた。

まだ封は切られていない。比奈は、いつ買ったのだろう、と思った。

「いち、やさん、これ？ 持ってたの？」

「まさか、さっき買ったんだよ」

壹哉はシャツを脱いだ。壹哉の身体は二年半前よりも筋肉がついていた。壹哉がスラックスのボタンを外したところで、こくりと唾を呑む。

壹哉は出会った時から魅力的だった。本当にカッコイイ人だと思っていた。憧れの人だった。

壹哉は何をしても魅力的で、ストイックな雰囲気の彼が服を脱ぐ様は、比奈の中の女の部分を刺激した。目が離せない。

いつも比奈を魅了する壹哉が、比奈の身体に覆いかぶさる。

ブラウスもスカートも脱がされた比奈のショーツの中に、壹哉の手が侵入してきた。身体を横に向けて手から逃れようとするが、壹哉はそれを許さない。身体に重みをかけてくる。身体を横に

「は、あ」

比奈は久しぶりの感覚に一瞬目を見開いたが、ふたたび目を閉じて、壹哉の肩に手を回した。両脚の間に壹哉の身体が割って入ってくる。さらに強く目を閉じた。

吐息がもれる。自分でも信じられないほど甘い声が出て、顔が熱くなる。

かつて、つきあっていた頃も、こういう甘い声を出していたはずだ。でも今夜は久しぶりなので、すごく恥ずかしい。声を出すまいと思っても、つい出てしまう。

比奈の内部は、吉哉の長い指を感じている。比奈の吐息と混ぜて、吉哉の喘ぐ声も聞こえる。

濡れた音を立てる自分の身体が、とにかく恥ずかしい。キスをされた時からすでに濡れていたのだ。

「ん、ん……っふ」

内部に感じていた異物感が消えた頃、比奈は目を開いて吉哉を見た。吉哉は、四角いパッケージを口で噛み切るところだった。比奈が瞬きをすると、その目蓋に吉哉の指が触れてくる。比奈が目を閉じると、またキスをされた。息苦しさに目が回りそうだった。

やがて比奈の隙間に指より大きなものがあてがわれた。それは隙間を、ゆっくりと、慎重に、埋めてくる。

久しぶりの行為だから、痛みは少しだけあった。だが隙間がびったりと埋められると、痛みよりも快感が勝っていった。

身体の内部から込み上げる、何とも言えない感覚。満たされている快感。

まだ腰を揺すられているわけではないのに、繋がっている部分から身体全体が疼きます。

比奈の頬を吉哉の大きな手が撫でた。その手に比奈は自分の手を重ねて、大きな手を頬に押し付けた。

「この感覚……、久しぶりだ……」

吉哉が吐息の合間に放った声は掠れていた。比奈も吉哉の頬に触れた。頬に触れた手のひらに、吉哉がキスをする。穏やかなのはそれまでだった。吉哉が我慢できないように比奈を見て、腰を強く突き上げる。

「あっ……！」

不意に身体を揺らされて、思わず声が出る。唇を噛みしめてシーツを掴む。身体を揺すられる度に吉哉の一部がなじみ、濡れた音を立てる。それが恥ずかしいけれど、声は止まらない。

「比奈、声を我慢しないで！」

そう言われても、首を横に振るしかできない。吉哉はさらに比奈の身体を揺らしてきた。喘ぎ声を押し殺していたけれど、そんな抵抗はすぐに尽きた。恥ずかしいほどの声が出てしまう。でも、恥ずかしいと感じられたのも、最初のうちだけだった。久しぶりの吉哉との行為は優しいとは言えない。けれど、比奈を求める気持ちはよく伝わってくる。彼の忙しない呼吸が比奈のすべてを欲しいと言ってくれているような気がして嬉しい。つきあっていた頃のように、比奈は吉哉の行為をすべて受け入れた。

涙がにじみ、それが頬に落ちるのもまったく気づかないほど、吉哉との行為に夢中になっていた。しばらくすると、身体の奥底から込み上げるような快感を覚えた。

「いち、や、さん」

比奈は、我を忘れた。一体何度吉哉の名前を呼んだかわからない。それくらい夢中になり、気持ちよかった。「あ、あ、あ……っん」

声が抑えられない。吉哉の行為が強いのもあるが、身体が敏感になっている。逃れられない感

覚が大きくなって一度弾けたのに、まだ壱哉の行為は終わらないから、どうしたらいいか分からなくなる。

「あ……っだめ」

息が苦しい。もう何も考えられない。ただ、壱哉の手や唇、そして比奈の中にある壱哉の一部を感じている。強い快感を引き出すような、壱哉の行為。これからはずっと、またこうして愛されるのだろうか、と考えたが、その考えもすぐに霧散してしまう。繋がっている壱哉の腰の動きが強く早くなったからだ。

しばらくすると壱哉が強く腰が強く突き上げ、二度ほど揺すって止まる。

壱哉が達した時、比奈も同じように達していた。

忙しなく息を吐きながら、しばらく抱き合って天井を見つめていた。

比奈は、愛している人との久しぶりのセックス、久しぶりの快感に浸った。

* * *

比奈が目覚ますと、ネクタイを締めながらこちらを見ている壱哉がいた。

「起きたね」

比奈はゆっくりと起き上がる。

壱哉は、比奈の傍らかたわに来て肩に手をやった。そして、比奈の裸の肩と胸に、肌触りのよいガウンをかけてくれる。

私ったら裸で寝ていたのか、と比奈はガウンの前をかき寄せた。壱哉はそんな比奈に微笑みかけ、頭を撫でた。

昨夜は、一度した後、二人で入浴した。そしてもう一度して、それからまたお風呂に入った。

「私、疲れて、あのまま寝ちゃったんだ……」

壱哉がうなずいて、比奈の髪に触る。

「今、何時ですか？」

「九時半」

「よかった」

壱哉は冷静だな、と思う。比奈のほうは、恥ずかしさでうるさいくらい心臓がどきどきしているというのに。

「一回しかしないと思ってたのに」

「……嫌だった？」

少しのためらいもなく聞く壱哉に、この人は変わってないな、と比奈は思う。

「嫌じゃありません。私が受け入れたのだから」

「朝食は？ 食べる？」

比奈は首を横に振った。

「お腹空いてるけど、一度家に戻らないとダメなんです。十一時には、塾にいたいから」

比奈は立ち上がって、服を探す。

「私の服……」

「服も下着もしまっておいたよ」

壱哉が、クローゼットを指差す。比奈がクローゼットを開けると、何着ものスーツが掛けられていた。比奈と壱哉が再会した時のブルーのスーツもあった。その隣に比奈の服が綺麗にかけてあり、下着も近くにまとめてあった。

「着がえるところ、見てるんですか？」

比奈が恥ずかしがると、壱哉はソファに座ってにこりと笑う。

「いつも見てなかったっけ？」

比奈は何も言い返せず、深呼吸して、壱哉に背を向けた。ガウンを脱ぎ、下着をつけ、スカートをはく。ブラウスを着てボタンを留め、身支度を整えてから、壱哉に近寄った。

「今日も、コンタクトですか？」

「うん。だけど今は裸眼」

「じゃ、さっきの着替えは見えてなかった？」

「でも、比奈さんの仕草で何をしているかは、何となくわかったよ」

壱哉はコンタクトレンズを洗浄してから目に入れた。

「壱哉さんも仕事でしょ」

「会社に一度行ってから、午後の便でアメリカへまた発つ」

アメリカ、と聞いて、比奈はかすかに動揺した。

「そうですか」

何とか平静を装い、そう言った。

「比奈さん、君はどういうつもりで僕に抱かれたの？」

壱哉が比奈の手を取って言った。

「どういうつもりって……」

「これから、君は僕とどうするつもり？」

「そんなこと……まだ……」

「ただ気持ちが高ぶったせいで僕に抱かれたというなら、僕は、昨日のことを謝らないと」

比奈はその手を振りほどいて、壱哉をにらむ。

「私、そんなに軽くないです！」

壱哉は比奈の言葉に満足した。そしてもう一度比奈の手を取って言う。

「じゃあ、重く考えていいよね」

「重くって……意味が……」

「僕の心を君に捧げるから、僕の願いを聞いてほしい。一生、僕のそばにいてくれないだろうか」
比奈は息が止まりそうだった。

「いきなりそんなこと……」

「前にも言ったよ、同じようなこと。また、断る？」

「返事は、急がなくてもいいんですけどね」

「今の気持ちを聞かせてほしい。もう君を手放したくないから」

比奈は戸惑った。けれど、二年半前にも同じことを言われているのだ。結婚してアメリカについて来てほしい、と。

しかしその時は、断ってしまった。そして壹哉は比奈を追いかけなかった。断られてなお、しくしくしたくなかったのだろう。

自ら断ったのだが、比奈はその後、とても苦しんだ。壹哉が結婚したと聞いた時、胸がつぶれそうなくらい寂しくて、辛かった。

「壹哉さんは、これからのことを約束してくれるんですか？」

「約束するよ。だから今度は君も覚悟を決めて。一生そばにいる覚悟を」

そう言われて、比奈は胸が熱くなった。涙が出そうになる。

あの時ついて行っていれば、と本心ではいつも後悔していた。

素直に壹哉の胸に飛び込めなかったのは、恋に人生を懸けるのが怖かった。それに、仕事のこと

も諦められなかった。つまり、未熟だったのだ。でも今は違う。

恋に懸けたつていいじゃないか。比奈は、これまでの仕事で人生を渡っていく充分なキャリアを積んできた自負がある。もう恋を優先しても大丈夫という自信がある。

「私、もうすぐ三十歳なんですよ、壹哉さん。言っていること、わかります？」

壹哉は比奈の言葉にうなずいた。そして比奈の身体を引き寄せた。

「二十代のうちに、結婚したいんです」

そう言った比奈を見て、壹哉は言った。

「バツイチの男でよければ、いつでもどうぞ」

比奈も笑顔を浮かべて、そして言った。

「……私でよければ、一生壹哉さんの、そばにいます」

壹哉は微笑んで比奈を抱く手に力を込めた。

優しいキスをくれて、「ありがとう」と言った。

「だけど、こんなに簡単に決めていいの？」

「簡単じゃない。すごく時間がかかった」

壹哉からプロポーズされたのは、これが二度目だ。

「二度も振られたらどうしようかと思った」

小さな声で「ホッとした」と付け加えた壹哉の身体に、比奈は身を預ける。

一生そばにいる、という言葉に嘘はなかった。後悔もまったくない。比奈は、幸福感に満たされて壱哉の胸に飛び込み、背中に回した手に力を込めた。

3

インターホンが鳴ってドアを開けると、会社の部下が二人いた。壱哉はドアロックを外して、その二人を見る。

「おはようございます」

妙に改まって挨拶するのは、秘書を務める春海だった。

「気持ち悪いな、春海。下心でも？」

壱哉が返す。

「そんなことないわよね、春海」

眼鏡を押し上げながら言ったのは、壱哉と同期の女性、みやがは宮川だった。

壱哉は朝早くからの二人の訪問を不思議に思いながらも部屋の中に招き入れた。

「そろそろ出発の時間です。宮川さんも、です」

春海に言われ、壱哉は答える。

「わかった。会社へは顔を出さなくていいのか？」

「結構です」

春海から言われて、壱哉は再度、わかった、と答えた。壱哉は、まとめてあった荷物を取りに寝室へ入ると、乱れたベッドが目に入った。

先ほどまでいた比奈は送ると言ったのに、自分で帰ると言い張った。別れ際にエレベーター前で、壱哉にキスを残して。

『電話、待ってますね』

一言そう残し、比奈はエレベーターに乗った。

比奈と再会してまだそれほど時間はたっていないにもかかわらず、比奈は壱哉を受け入れた。そして「一生そばにいる」と約束した。

比奈は堅実な考え方をする女性で、冒険はしないが、確実に何かをやり遂げようとする。反面で、その考え方が、比奈を保守的でやや受動的に見せているかもしれない。そして人見知りなどところもある。壱哉とつきあっていた頃の比奈は、自分から壱哉に対して働きかけることはなかった。殊^{こと}セックスに関しては、保守的だった。

比奈との久しぶりのセックスはもどかしく、それがまた妙に壱哉の心を揺さぶった。しかし今回、誘ったのは壱哉からではなく、比奈からだ。先に部屋に行かせ、もしも帰ってしまったのなら、仕方がないと思っていた。壱哉はフロントでスペアキーをもらい、近くにあるコンビニに行き、避

立ち読みサンプルは
ここまで